



CoReCa

2 評議員会長あいさつ

3 理事長あいさつ

4 自分の中にある地図が広がる

10 人にリアルに迫る

12 とにかく話す、たくさん話す

14 はじまりのはじまり

16 教師が変わる、授業が変わる

18 出（い）し（ん）・出（い）し（ん）・出（い）し（ん）

20 校長の出番

22 **特集** アクティブラーニングで何が変わるのか

30 りんご記念日応援団

32 二〇一五年度の取り組み

34 トービー校支援プロジェクトの振り返り

35 財団の概要

36 財団の組織



野間省伸のまのぶ

評議員会長

あいつつ
きっかけから始まる一歩

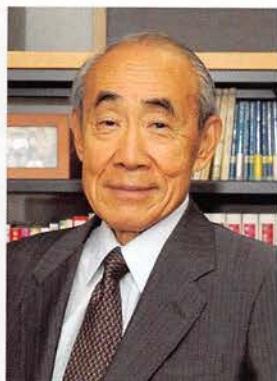
公益財団法人国際文化フォーラム (TJF) は1987年の設立以来、「ことばと文化」をキーワードに活動を続けております。出版物としての本やマンガはまさに「ことばと文化」を体現するものですが、のみならずそれぞれが新たな世界へのきっかけを与えるものであり、時をおいて、二度、三度と繰り返し読むことで長い時間付き合っていくものでもあります。

私は幼いころ、姉たちの影響で松谷みよ子さんの「モモちゃん」シリーズをよく読んでいました。特に『モモちゃんとアカネちゃん』は、自分にもちょうど妹が生まれたときだったので、モモちゃんと自分を重ね合わせて読んだことを覚えています。最近、娘が読むようになって改めてシリーズを開いてみると、今度は親の気持ちがよく理解できます。

さらに、一人ひとりが自分のイメージを広げ、そして人によってイメージが異なることを知って、その違いを楽しむこともまた本の大きな魅力といえるでしょう。

日本の小説を海外の人たちにもっと読んでもらいたいと思い、講談社では地道な取り組みを続けています。アメリカの書店で、マンガは「日本」の棚が設けられ、そこに置かれています。ほかにはない深いストーリー性が「日本独自」の文化として確立されたのです。しかし、小説にはそうしたコーナーはありません。村上春樹さんの作品も著者名の「M」のコーナーに並んでいます。村上春樹さんの作品に限らず日本の優れたコンテンツはどんどん世界各国の作品と競争していかなければならないのです。しかしそれは可能だと思います。ミステリーを例にみても、今や日本のミステリーが世界中で翻訳され、多くのファンの心をとらえています。課題は、日本の小説のおもしろさをどう伝えていくかです。そのために必要なのは共感づくりだと思っています。

TJFでも、若い人たちがはじめの一歩を踏み出し、その道が少しでも長く続くよう、共感を得られるプログラムを推進していく所存です。一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。



理事長

渡邊 幸治
わたなべ こうじ

あいさつ

新しい友情に向けて

私たち公益財団法人国際文化フォーラム (TJF) は、数多くの情報が発信され、的確に対応し行動することが求められる国際社会において、若い人たちがさまざまな文化背景の人たちとともに活躍することを願い事業を行ってまいりました。

今年で10年めを迎える「好朋友」プロジェクトは、中国の中学生に第二外国語として楽しく日本語を学んでもらうためにはどんな教材が相応しいか、大連側と真摯な議論を重ねるところから始まりました。横浜の中学生が大連に転校し、いろいろな問題に直面しながらも友情を築き上げていくストーリーマンガを、各巻の巻頭に配した全5巻の教材『好朋友』は、大連市だけでなく中国の中学・高校で採用されております。マンガへの関心から日本語に接し、日本への興味を高め、日本理解を深めている中高校生が多くいます。

また同様に、日韓の中高校生交流プログラム「Seoulでダンス・ダンス・ダンス」は、日本の高校生の間で関心の高いK-POPやダンスを入り口にすることで、新しい交流の機会をつくったのではないかと考えております。参加者のなかからは、韓国の友人のもとへ一人で出かけてさらに友情を深めたり、ソウルの大学へ進学したり、逆に韓国から日本に留学する若者も現れております。

このような若い人たちの交流がさらに多く生まれることを願い、本年度は新たにロシアとのプログラムを開始しました。『外国語学習のめやす』は副題に「高等学校の中国語と韓国語教育からの提言」とありますが、その枠組みのなかに留めることなく、大事な隣国のひとつであるロシアのこともばにも拡げていくものです。ロシア語版の作成とともに、教師交流、生徒交流を行います。かつてロシア大使として3年間奉職した私にとって感慨深いものであり、これからの社会を構築する世代が日露の新しい友情をつくる第一歩となることを念じてやみません。

今後も、若い人たちが新しい世界の扉を開ききっかけになる事業を続けてまいります。皆さまのご理解とご協力を賜りたくお願い申し上げます。

自分の中にある 地図が広がる

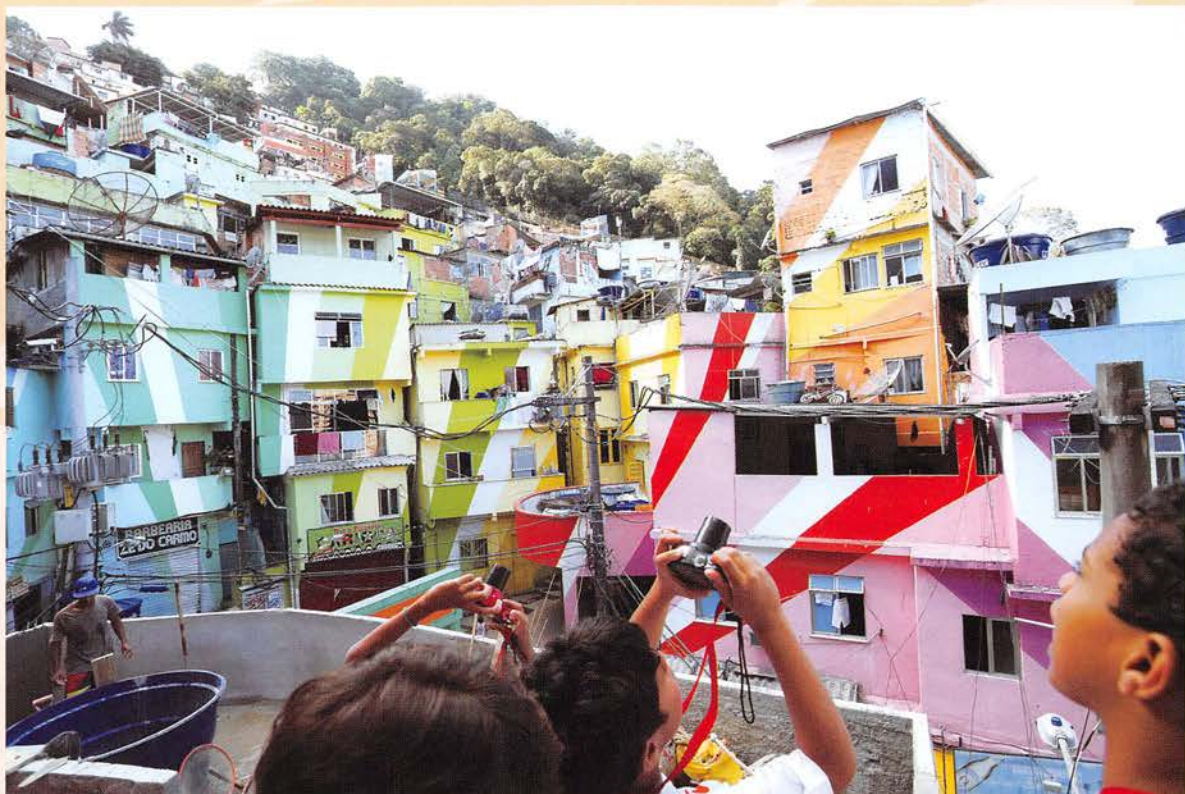
さまざまな言語や文化を体験できる「りんごをかじろう」プログラム。
2014年度は、ブラジル、ブータン、水墨画の魅力にふれた。



レンソイス・マラニャンセス国立公園。リオからサン・ルイスまで飛行機で4時間、その後車で4時間以上かかる。

地平線に続く広大な白い砂丘。その丘の間に無数の湖がきらめく。白砂と澄んだ青色が織りなす絶景はブラジル北東部のレンソイス・マラニャンセス国立公園。近年、一生のうちには一度は訪れてみたい場所として、人気を集めてきているスポットだ。石英の砂は透明感があって、砂地を歩くと白く輝く世界に包まれる。湖は乾季には干上がり、姿を消す。けれども、雨季になると再び現われ、水中には魚も泳ぐ。自然の神秘に満ちた地は、ブラジルの新たな魅力を発信している。

日本で堪能できるアマゾンの恵みにもファンが増えている。アマゾン原産のフルーツ、アサイー。色形はブルーベリーに似ているが、ヤシの一種だ。この小さな実の果肉には栄養価がいっぱい。デザート感覚で食べられているけれど、地元の人たちは、甘みのないスープ状にしたのを川魚のフライなどと一緒に食べる。産地では日系人が中心になってアグロフォレストリーも進む。森を作る“森を守る”農業と呼ばれ



ペンキで色鮮やかに生まれ変わった自分たちの街を写す子どもたち。ワンダーアイズプロジェクトでは、これまでにリオの13のスラムでワークショップを行った。



採れたてのアサイー。パラ州はアサイーの産地。アマゾン川河口の州都ベレンの港では、夜中を過ぎた頃から、アサイーを積んだ船が着き始める。朝5時には、実がぎっしりと詰まった籠が広場を埋め尽くす。

ブラジル余話： 広がる魅力

文・写真 ^{ながたけ} 永武ひかる

ブラジルを20年以上にわたり取材・撮影。2000年より非営利の写真プロジェクトを主宰。著書に『世界のともだち3__ブラジル』（偕成社）、『アマゾンの呪術師』（地湧社）などがある。

る、未来につながる取り組みだ。エナジー・フードのふるさとには、そういう人びとの力も注がれているのだ。

世界の観光客を引きつけるリオ・デ・ジャネイロ。ビル群のそばに白浜のビーチが広がり、自然と都市が調和する希有な街。世界遺産にもなっている。人口約七百万の大都会はオリンピックを控えて建設ラッシュ。治安の問題を抱えながら、変わりゆくスラムもある。ペンキ会社の協力で住民が家の壁に色を塗った地区、アーティストの協力でグラフィティ（壁画）で飾られた地区。色やデザインで心踊るような町並みが生まれ、観光ツアーが組まれるところもある。私が主宰するワンダーアイズプロジェクトでは、子どもたちが写真を撮ることを通じて発見、表現する活動を行っているのだけれど、スラムでも子どもたちのまなざしが活力ある人と社会を映し出した。壁画に書かれた「愛と平和」の文字、青空を泳ぐ凧、親指を立ててOKサインでポーズする人……。気さくで陽気、そして前向きな人たち。その明るいパワーこそがブラジルの魅力を支える要にちがいない。

ブータン 聖地を巡る山旅

こばやしなおゆき
文・写真 小林尚礼

ヒマラヤ・チベット地域をフィールドに撮影・執筆活動を行っている。
著書に『梅里雪山 十七人の友を探して』（山と溪谷社）などがある。



自分の中にある
地図が広がる

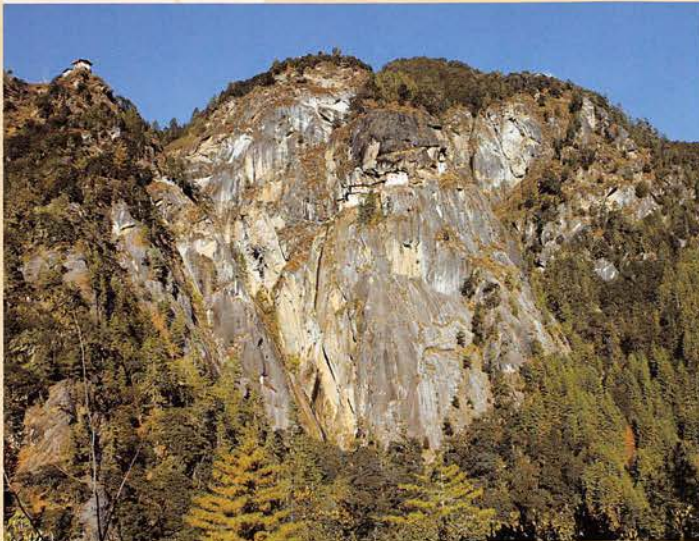
「幸せの国」として知られ、GNPよりGNH（国民総幸福量）を大切にするブータンですが、その自然の豊かさはあまり知られていません。ブータンはどこまでいっても山また山です。その多くが緑に覆われていて、南部の亜熱帯ジャングルから北部の高山植物帯まで変化に富んでいます。そこに多種多様な動植物が生息しています。

私は「自然の聖地」が好きで、ヒマラヤ・チベット地域を撮影しながら歩いています。ブータンに行きたいと思っていたところ、医学調査に参加してブータン人のポートルートを撮る機会がありました。撮影と同時に、英語と片言のゾンカ語で幸せについての質問をしたところ、幸福度の高い人が確かに多かったのですが、理由を聞くと「家族といっしょにいられるから」とか「健康だから」という答えが多くて驚きました。私たちが当たり前と思っていることに、大きな価値を感じていることが不思議でした。

その調査がきっかけとなって、そ

の後何度もブータンの聖地を訪ねました。ツォンツォンマ（高い高い母の山）という恐ろしいな霊山では、無数のヒルや毒蛇、濡れた岩壁などに阻まれて撤退し、土地の人びとが畏怖する自然を存分に体験しました。チェン・ラ（もつとも高い山）という聖山は、頂上まで高山植物の花に覆われて、優しく気高い聖地でした。ジヨモ・クンカルという霊峰では、一年に一度男たちが山頂に登って祈りを捧げます。三六〇度見渡せる岩の頂上で祈る姿を見ていると、「大いなる存在」のようなものを感じました。

ブータンの聖地をいくつも訪ねた今こう思います。ブータン人の幸せには、家族のつながりや仏教などいくつかの要因がありますが、聖地や神々が今も自然のなかに息づいていることも大きな理由ではないか。聖地で祈ることによって「大自然の摂理」とつながり、自分の存在の安心感が得られることが、心の幸せにつながっていると思うのです。



高僧がトラに乗って飛来したという寺の建つ聖地タクツァン。垂直の大岩壁に圧倒される。

女神アマ・ジヨモが宿るといふ聖山ジヨモ・クンカルの山頂で、祈りをささげる人びと。



ブータンの聖地への旅は、深い森を歩くことから始まる。写真は霊峰ツォンツォンマへ続く道。

「写意」を重んじる水墨画は、宋代（九六〇〜一二七九）の文人画から発展したといわれています。日本の墨絵はもともと中国から伝わったものですが、独自の発展をした結果、両者には違いがあります。例えば、中国のそれは写実を重視せず、抽象的に描く傾向があるのに対し、日本のそれは写実的な傾向が見られます。

しかし共通点も多くあります。まず使う材料や道具、描く方法が同じこと、そして情趣の表現、つまり写意を重視し、描く対象を模倣することにはあまり重きをおかないことです。

生活にねざした水墨画

油絵や水彩画、版画、彫塑などは専門性の高い技法を求められるようになり、一般大衆からかけ離れた存在になっていきました。幸い、水墨画と墨絵は依然として生活に密着した庶民的なものであり、高嶺の花とみなされる運命は免れています。その理由は、水墨画・墨絵の美意識や表現方法と密接に関係しています。例えば、先にふれたように「写意」

水墨画がもつ可能性

文・絵 とうとう 唐涛

墨絵・書道・挿絵作家。書道で「国展賞」を受賞（1995年）。著作に『趣味の塗り絵・曼荼羅編』（ダイアプレス社、2006年）、挿絵に『摂津茂和コレクション』（ベースボール・マガジン社）などがある。



自分の中にある 地図が広がる



を重視し、模倣はしないこと。そつくりなものとうでないものの境目を追求し、質感や細部を表現することには心を砕きません。ですから、複雑な技巧と熟練を必要としないのです。次に、構図を決めたり絵の対象を選んだりする際に、そつくりそのままである必要がないこと。主観的に取捨選択し、描き手が描きたいと思う部分だけを表現することができ、つまりどこかを誇張して描いてもかまわないのです。第三に、使う道具は筆、墨、紙といった簡単なものなので、さつと描き上げられることです。

水墨画はもともと、落書きのような絵から始まったという説もあります。誰でも描けるものなのです。自分の身近なもの、心情や感情を表現するものです。私はそこに水墨画の可能性を見ます。

私は時々水墨画・墨絵教室で講師を務めることがあります。美術が専門でない人たちがいっしょに絵がきやグリーンディングカードを描くとき、一般の人びとに愛されるこの芸術がもつ新鮮さと強い生命力を改めて感じます。

今年も「りんごをかじろう」を実施しています。詳しい情報はfacebookやメルマガ「わやわや」でお知らせします。
Facebook www.facebook.com/TheJapanForum
メルマガ「わやわや」 www.tjf.or.jp/jp/wayaway

事業データ：りんごをかじろう

ポルトガル語 写真で知るブラジルの暮らし

期日：2014年6月28日(土) / 場所：東京・TJF / 講師：永武ひかる / 参加者：15名
協力：ワンダーアイズプロジェクト

中国水墨画 体験ワークショップ

期日：2014年7月5日(土) / 場所：東京・日中学院 / 講師：唐涛 / 参加者：33名
協力：日中学院 / 後援：中華人民共和国駐日本国大使館教育部、文京区
助成：漢語橋基金

ブータン 聖地をめぐる山旅

期日：2014年12月13日(土) / 場所：東京・講談社 / 協力：カワカブ会
講師：小林尚礼 / 参加者：25名



「りんごをかじろう」では講師の方々の話に加え、その土地のものを食べたり飲んだりしながら話をする。インターネットで検索すれば何でもわかる時代だからこそ、人と会うことを大切にしている。

くわく にっぽん



ユニコーン・ランスロット
(2013)

使うのは紙と指だけ。折っては開く、折っては開くを繰り返す。自分の折り紙は「トライ＆エラー」だと語る西田さん。

1枚の紙から、頭が生まれ、胴ができ、足ができ、指が折り出されていく。それは生物が細胞分裂を繰り返し生長していくプロセスと似ていると語る。そして、西田さんは何年も、折っては開く、を繰り返し、より完成に近づけていく。



カブトムシ ver.6
(2008)

西田 に だ 折り紙アート シャトナー



ティランノサウルスを折る
プロセスが動画で！

人にリアルに迫る



けん玉=伝承遊び、ではない。アメリカのグループ「Kendama USA」のけん玉を見れば、うなづくにちがいない。手軽に持ち運べ、一人でも楽しめることから、ストリート系スポーツをやっている人たちが遊びだしたのが始まりらしい。そして、ブームは日本でも。日本でのパイオニアともいえる河本さんは、ストリート系ファッションに身を包むおしゃれな「Kendaman」として、けん玉を「人とつながるのに最強のツール」と語る。

河本 こ も の の が あ き ストリートけん玉



華やかなテクニク
が動画で！



写真：北郷仁

白塗り、その後 津野氏

人の内面に迫る「My Way Your Way」コーナーの初陣を飾ったのは、そのとき原宿で話題だった白塗りの「津野氏」。2012年10月のことだ。それから2年半。津野氏はいったいどうしているのだろうか。

学生だった彼女も現在は社会人。写真は最近の姿。白塗りはしていないが、津野氏ワールドは健在だ。なぜ彼女はこうしたファッションに身を包むのか、なぜ白塗りをやめたのか。ぜひ記事をご覧ください。



独特な世界観を描いた
自作の絵も掲載

4言語で
発信中



事業データ

くりっくにっぽんワークショップ

- 期間 ①10、11月 ②5、7、11月
 場所 ①オーストラリア・ニューサウスウェールズ州、ビクトリア州など計5カ所
 ②韓国・ソウル、清州など計4カ所
 助成 一般社団法人尚友倶楽部
 協力 ①国際交流基金シドニー日本文化センター、ビクトリア州日本語教師会、ニューサウスウェールズ州教育省
 ②国際交流基金ソウル日本文化センター、韓国日本語教育研究会
 内容 日本語の授業で生素材を使うことの意味を考え、「くりっくにっぽん」のコンテンツを使った授業案を作成。

とにかく話す、たくさん話す



黙って歩き回ることから始めて、アイコンタクト、声を出して「你好」「こんにちは」、握手、とだんだん距離を縮めていく。最後はハイタッチ。

①7年後の自己
用这两天的经验
加油工作!!



円になって、参加者が自由に考えたジェスチャーとことばをリレーする活動。写真はなにか重いものを手渡しているシーン。

②2年後の自分へ
迷路で悩んでる時に、私はね、その時、自分を信じ、この経験をもっと、もっと、もっと、何かに加え!!

合宿2014

中国語を学ぶ日本の高校生と、日本語を学ぶ中国の高校生が交流できるのは実質一日半。なるべくたくさん会話が生まれることを目標に、プログラムを組んだ。初対面で緊張気味の高校生たちがリラックスできるよう、身体をほぐす活動からスタート。特に日本の高校生は外国語で話すのをためらうことが多いので、身体の動きに合わせて中国語と日本語を発する活動を、少しずつ取り入れていく。

心身ともにほぐれたところで、グループにわかれて、中国語と日本語で好きなことばを選び、それを身体を使って表現する。大きなアクションをとったり、床に寝っ転がったり、教室くらいの大きさの部屋が熱気でムンムンしてくる。

自作の紙芝居を使って部屋を歩きまわりつつ全員に自己紹介するところには、三十六人の中国語と日本語が部屋中に響いていた。

③10年後の自分へ
お時間があるか?



美術作品に描かれた世界を身体で再現する。

1年後の自分
警察官には立派に人のために苦しい時でも諦めず強く優しい警察官でいたい!!

写真：永沼敦子



2日めはグループに分かれて浅草と原宿で自由行動。



すべての活動が終わった2日めの夜。いっしょに出かけた先での写真を見ながら話し込む。



中国の高校生は日本語で、日本の高校生は中国語で紙芝居をつくった。



グループでテーマを決めて身体で表現する活動。このグループは、「人間の進化(人類的進化)」を表現した。

事業データ

互いのことばを学ぶ日中高校生交流プログラム「りんごの合宿」

期間	11月19日(水)～24日(月)
場所	東京、神奈川
主催	中等日本語課程設置校工作研究会、TJF
助成	公益財団法人三菱UFJ国際財団
輸送協力	ANA
参加者	中国の高校生18名、日本の高校生18名、計36名

韓国語に出会って世界が広がった

石川 咲 (駒澤大学 経済学部 1年)

韓国語を学んでいちばん変わったことは、いろんな行動が起こせるようになったことです。世宗^{セジョンハクタン}学堂では同世代の友だちといっしょに勉強ができるので、ほかの子がしゃべっているのを見て、「自分ももっと勉強しよう」と刺激を受けました。それまでは趣味もなく、部活に打ち込むわけでもなかったのが、どんどん韓国語に夢中になり、韓国に留学したいと思うまでになりました。

高校でいちばん頑張ったのは韓国語だし、高校時代に何かやったといえることを残したかったです。そこからインターネットで情報を調べ、世宗学堂の先生に相談に乗ってもらい、バイトも頑張ってお金を貯めました。そし

て高3の夏休み、念願だったソウルにある建国大学で3週間の留学が実現しました。気がつけば、韓国語がすべてのモチベーションになり、どんどん行動を起こせるようになっていたのです。



大学生になった今もその影響は続いていて、ソウル東国大学への交換留学が決まりました。来年、現地の同世代といっしょに経済学の授業を受けることがとても楽しみです。

は じ ま り の は じ ま り

「中国語／韓国語を勉強したいのに学校に講座がない」そんな中高校生の声に応えようと、他の機関・団体の協力も得て講座を開いている。短いものは三日、長いものは一年近く続く。講座では、学んでいる言語を実際に使う機会を設けている。広い世界へ踏み出すきっかけとなる、こぼれとの出会いの場をつくりたい。

事業データ

駐日韓国文化院世宗学堂「中高生のための韓国語講座 2014」

期間 2014年4月12日～2015年3月14日(毎週土曜日)
場所 東京・駐日韓国文化院
主催 駐日韓国文化院世宗学堂
共催 TJF
講師 鄭賢熙
参加者 20名



蘇州の建物を再現した門。中国だけでなく、アジアの国々の伝統的な建物が再現されているホールでは、留学生と交流できるようになっている。

中国語で話そう

最終回となる10回めは、神田外語大学の中国留学生との交流。留学生3人が持ってきたひまわりの種をテーブルに出すと、空気が一気になごんだ。食べ方を教わりながら、それまでの講座で学んだ中国語を使って交流。中国語を実践するだけでなく、大学の様子や留学の話も聞いて、これからの進路を考えるいい機会にもなったようだ。

事業データ

土曜日中国語講座

期間 2014年9月～12月(全10回)
場所 千葉
主催 千葉県高等学校教育研究会中国語部会、TJF
助成 漢語橋基金
協力 千葉県立幕張総合高等学校
講師 于平(高校中国語教師)
参加者 7名(千葉県内の高校に在籍する生徒対象)

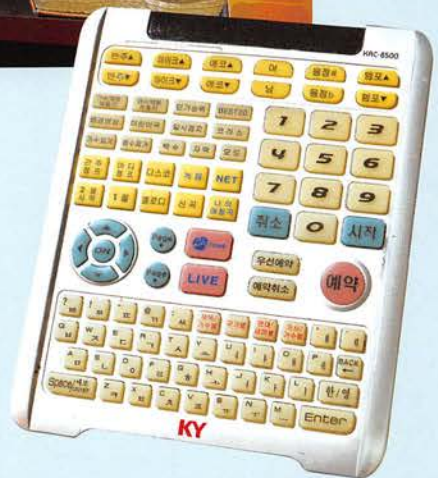


HAJIMARI
no
HAJIMARI



K-POP を歌ってみよう

講座が始まったとき、独学でハングルが読める高校生もいれば全く読めない高校生もいた。ひとつ共通していたのは、歌いたいK-POPがあったこと。ひとは、韓国ドラマを観ているうちに主題歌も大好きになったので歌いたいという。講座では歌詞の意味も調べ、ほかの参加者にどんなところが好きなのかも熟っぽく語った。そして最終回。場所は新大久保のカラオケボックス。ハングルで書かれた歌本、選曲用リモコン、字幕。全員、自分で歌いたい曲を入力し、歌いきった。



韓国カラオケのリモコン。数字の「0」の左にある青いボタンが「キャンセル」、右が「スタート」ボタン。韓国では一曲全部歌うことは少ないので、この二つさえ押さえておけばOK？

事業データ

高校生のための韓国語講座2014
—K-POPを歌えるようになるう—

期間 8月23日(土)～25日(月)
場所 東京・TJFなど
主催 TJF
参加者 4名

新着の曲リスト。壁には、毎月更新された新着リストが貼られている(左)。

写真：北郷仁

山田道雄
19才
私立法華部1回生
両親和才、妹高2
大阪府~~市~~大東市
自宅生
海外歴: 高校修学旅行
オーストラリア(1回)

92

高校時代サッカー部(行動でドイツ語を吸収、動画)

シムラタ 奈大
高校生
16歳
カラオケ
ホフシグ

興味と持点
父はホフシグ
母: 主婦
父: YKK
アルバイトなし
バスケット部
英語に強い!

けんた
スペイン語勉強中
さゆりか系

高校時代は
部活一軒
今、同好会
19才 大学2年生
実家に両親と祖母
既婚の姉あり
子供と遊ばない
常に彼女がいる
英語と勉強
将来は会社

佐藤あゆみ さん!
19才, 外大の2年生

将来は
国連で働きたい

都活は
DANCEに入社
してk-popに
合わせて踊るのが
大好き!

千葉出身
大学の近くで
1人暮らし。
父はDJ、母は
専業主婦
韓流が好き
姉: 双子
京都の
大学留学

高校の時、
カタタ「留学で
親くなった
韓国人の友達が
自由に話した!!

話したいことは
たくさんあるけど
つくえに聞いて
ほしいものは
ありません

バイトは
新大の隣のAM-shop
(韓国のお店)
99才(笑)

ハリー 18歳
(イギリス)

日本語を
勉強したい

J-Popが
好きです

日本の文化
幕僚中では

◎居酒屋でKPOPを聴きたい
◎おしゃべりが好き
◎英語は代々の通訳生
経験があるので

◎空手7フルコンパニ
◎アニメ好き
友だちとプレイステーションで遊ぶ

実は漢字が
好きです

你好

家族
父: 専業主婦
兄: 専攻学生
卒業後、専攻
つて

英語が大好き
中国語は漢字が好き
もう中国語を勉強
したい。英字も2000
単語。

将来は中国語を勉強
行動力が旺盛な人
になりたいです

金剛路の
学生
(英語)
日本語が
上手い
(19才・大学1年生)

授業が亦々ある、 教師が亦々ある、

山野香澄
高3 17才
大阪: 箕面市
小中高大一致校
(本人は外部受験と考えていた)
東京に行きたい(東京の事情で)
(飲食)

家族
母 姉 妹
(女) (女) (中)

パーティシ
(神戸大学)
本人は、この店まで来り

K2の時に
プレゼンのスタイルに依
って、プレゼンテーションは
弱い!

フランス語: 第2外国語で
3年目

写真: 中才知弥

研修が変えたもの

古田富建・帝塚山学院大学教授

「先生、どうしたの？」

夏のマスター研修受講後、最初の授業で学生からそう言われた。韓国でのフィールドワークに向けた授業を春から行っていたのだが、このときに活動ごとの目標、最終的な目標と課題を学生に示した。最終的に何ができるようになるのかを、事前に学生に示すことの重要性を研修会で認識したからだ。

数年続いているフィールドワークだが、今回初めて動画の作成を課した。さらに、訪問先の韓国・スウォンでは現地の大学生と交流し、韓国語を使わなくては行けない場を設定した。これも初めてのことだ。大丈夫だろうかと不安はあったのだが、学生はなかなかやるのである。動画作成は難しいだろう、交流はうまくいかないだろう、教室で私が伝えた知識を実際に見るだけで十分だろうと、学生を自分の枠に入れてしまっていたことに今回気づいた。

フィールドワークの一連の授業を設計するときに、「外国語学習のめやす」が示す「3×3+3」は有効だった。フィールドワークのテーマのひとつが「スウォンの観光資源」だったが、ここに「言語」領域と「グローバル社会」領域をうまく入れることができた。「外国語学習のめやす」は、私のように言語教育の専門でなくても、「文化」「社会」を踏まえた新しい授業をめざすときにより生きてくるのではないと思う。



事業データ

「外国語学習のめやす」マスター研修

期間 夏：8月2日(土)～6日(水)
冬：12月6日(土)、7日(日)
場所 兵庫県・六甲
講師 山崎直樹(関西大学教授)
参加者 外国語担当教員18名
(うち3名はサポーターとして参加)

※報告された実践の成果は
TJFの「めやすWeb」に掲載。



二〇一三年度から実施している「外国語学習のめやすマスター研修」。「外国語学習のめやす」の考えに基づいた研修はそれ自体が新しいスタイルだ。マスター研修参加者十八名は教えている言語に関係なく、三、四人のグループに分かれ、グループごとに授業プランを作る。今回はまず、どんな学習者を対象にするのか、学習者像を具体化していった。どんな性格で、部活は何をやり、趣味は何なのか、なぜそのことを勉強したいのか、週にどれぐらい学習に使える時間はあるのか、など。この作業が、それぞれの学習者の関心や興味と連携した授業プランを考えることにもつながり、ひいては学習

効果を高めることになる、と主任講師を務める山崎直樹・関西大学教授は言う。
参加者の教える言語は英・韓・西・中・独・日・仏・露で、教える場所も高校もあれば、大学もある。ひとりで授業プランをつくるときは目の前の学習者を考えればいいが、今回のような場合には、共通した土台があったほうがいい。そのほうが有益な議論になると考えての作業でもあった。さらに、みんながワイワイと楽しく考えることは、アイスブレイキングの役割も果たす。
ここから始まり、さまざまな作業を経てできあがった授業プランを、参加者一人ひとりが秋に実践する。そして、冬

の研修で発表し、コメントを出し合う。こうした切磋琢磨で最終的にはグローバルな視点をもったプランが生まれる。
参加者のひとりが言った。「この研修は期間も長く、課題も多いのでハードルが高い。そもそも『外国語学習のめやす』を取り入れること自体、それまでのやり方を一度ゼロに戻して、再構築していかなくてはいけないから負荷が非常に大きい。でも、これぐらいの負荷がかかれば教師は変われない」と。



ダンス 댄스 ダンス 댄스 ダンス 댄스

「ハンパなく自分のことが好きになった」

プログラム中、そんなメールが保護者に届いた。ダンスにも韓国語にも自信がなくて、グループ活動にとけこめない。ほかのメンバーが声をかけていっしょにダンスを練習するうち、少しずつ体が動くようになり、表情も硬さがとれて笑顔がこぼれるようになっていった。

ダンスの振り付けがなかなかまとまらないチームもあった。意見を強く主張するメンバー、賛成ではないのに反論できないメンバー。あるとき一人が「学校の話しよう」と切り出した。絡まった糸がほぐれていくように、そこからみんなが自分の意見を言い合えるようになった。

いよいよ4チームによるダンス対決。会場での投票にインターネット投票を加えて、2チームが同点優勝となった。

事業データ

日韓の中高校生交流プログラム 2014 SEOULでダンス・ダンス・ダンス

期間	12月26日(金)～30日(火)
場所	韓国・ソウル
主催	財団法人秀林文化財団、TJF
助成	公益財団法人双日国際交流財団、公益財団法人日韓文化交流基金
後援	秀林外語専門学校
協力	韓国日本語教育研究会、国際交流基金ソウル日本文化センター、高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク
輸送協力	ANA
参加者	中学生4名(日本1、韓国3)、高校生28名(日15、韓13)、計32名 日本の参加者は北海道、山形、兵庫、埼玉、千葉、東京、神奈川、岐阜、長野、大阪、福岡 韓国はソウル、仁川、京畿道、忠清北道、忠清南道、慶尚北道、釜山
内容	韓国語を学ぶ日本の中高生と日本語を学ぶ韓国の中高校生が日韓混合のチームに分かれて、5日間合宿しながら、ダンスや買い物、料理などを通じて交流した。



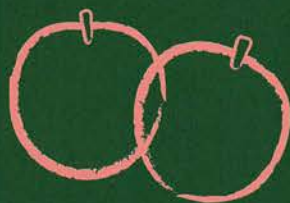
ダンス動画は
コチラ



参加賞のオリジナル
Tシャツと 귀요미対決
の優勝チームに贈ら
れた帽子

귀요미(カウイン)対決
8つのグループが、指定され
た色の「カウイン」を集め、
グループ代表の一人が、それ
を身に付けて「カウイン度」
を競った。

校長の出番



「自分たちの学校と交流してくれる学校を探しています。紹介してもらえませんか」中国や韓国の中高校で日本語を教えている先生からよく言われる。

要望にすぐに応えたいのだが、学校間での交流となると時間がかかる。そこで互いの言語を教える先生を紹介して、クラス交流を進めてきたこともあった。しかし、先生が異動すると途切れてしまったり、教師一人に負担が集中して長続きしない例を多くみてきた。学校間交流であれば、学校行事として組み込まれ、予算も確保され、担当の先生が異動しても交流は続く。

どうすれば学校間交流としてスタートが切れるのか。その鍵を握るのは校長だ。そこで、校長に互いの言語の教育と交流の必要性を認識してもらおうと二〇〇九年に日中校長交流プログラムを開始し、日本の校長を中国に派遣してきた。

昨年十一月、今度は中国の校長・副校長を招聘し、日本の高校の校長・副校長



と交流する場「りんごの交流会」を設けた。参加したメンバーには、友好校交流の交渉を進めていた横浜市立みなと総合高等学校の宮崎健校長と上海工商外国语学院の陳文珊副校長がいた。「海外の学校と交流するには、トップが強い信念をもつことが必要。事前に校長同士で、お互いの意思を確認していたこともあり、今回は英語で直接やりとりができたので話が早くまとまった」と宮崎氏は語る。二校は今年五月に正式に友好校提携を結んだ。

二〇一五年度は今年の日中だけでなく日韓の校長交流をソウルで行う。参加する校長の一人は「私と同じような考えの校長がいたら、その学校と交流したい」と言っ。また新たな学校間交流が始まるにちがいない。



提携に関する合意書を持つ宮崎校長。

事業データ

隣語教育に取り組む日中の高校校長交流プログラム

期間 11月19日(水)～24日(月)
場所 東京、神奈川
主催 中等日本語課程設置校工作研究会、TJF
助成 公益財団法人東華教育文化交流財団、公益財団法人三菱 UFJ 国際財団
輸送協力 ANA
参加者 中国で日本語教育を実施する高校の管理職等17名、22日の交流会には日本で中国語教育を実施する高校の管理職、大学の中国語教育関係者、日中交流団体関係者等18名が参加した。

隣語教育に取り組む学校（日本、韓国、中国）

中国
で

日本語教育を
実施している中高校
(2012年度)

271校

韓国
で

日本語教育を
実施している中高校
(2012年度)

2,762校

Source: 国際交流基金「日本語教育機関調査」

日本
で

中国語教育を
実施している高校
(2014年度)

517校

日本
で

韓国語教育を
実施している高校
(2014年度)

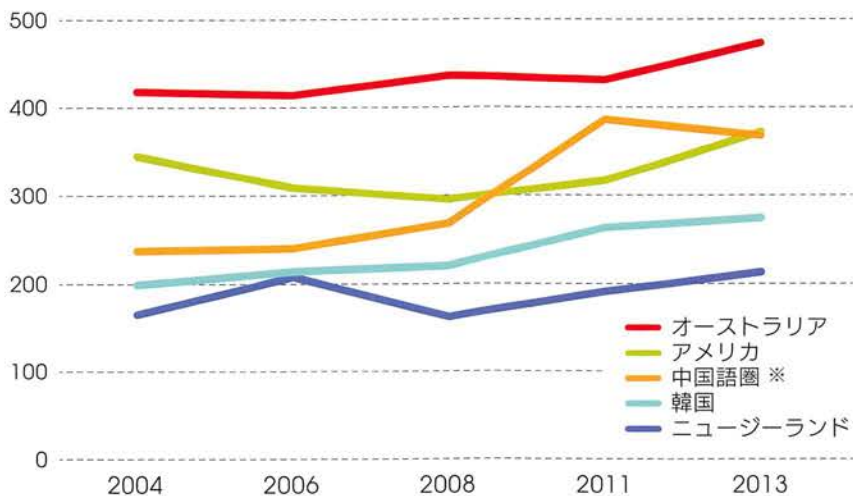
333校

Source: 文部科学省「高等学校等における国際交流等の状況について」

データで見る
隣語教育の現状



姉妹校提携をしている高校の国・地域



※中国語圏は中国、台湾、シンガポール、マレーシアを含む。

Source: 文部科学省「高等学校等における国際交流等の状況について」

アクティブラーニングで 何が変わるのか

次の学習指導要領で大きな注目を集めている「アクティブラーニング」。「アクティブラーニング」とは何なのか、なぜ必要なのか、どう取り入れたらいいのか、実践する上で何が必要なのかなどに迫るとともに、すでに実践している二校の取り組みを紹介します。

「教える」から「学ぶ」へ

溝上慎一（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）

1

高等教育におけるアクティブラーニングの提唱とその背景

高等教育で提唱され、世界的に推進されているアクティブラーニング（AL）は、簡単に言えば、講義一辺倒の授業を脱却し、書く・話す・発表する等の活動を入れる学習論のことである。

話す、発表するといった活動を入れることは、学習に他者や集団を組

み込むことを指す。それは、学習を個人的なものだけでなく、社会的なものにもしていく意味がある。他者の考え方やものの見方に触れながらある物事を理解すること、ある課題にグループで協同して取り組むこと等が、まさに社会で求められている。個人ひとりの知識がいくらあっても能力がいくら高くても、今日の多くの社会的問題、職場での問題はひとりでは解決されないといった事情も、ここでは重要である。さまざま

まな知識や考え方、背景をもつ他者と議論したり他者の前で発表したりする、ジェネリックスキルと呼ばれる技能・態度（能力）を大学教育で育てることが、これまでの知識の習得に加えて重要だとされる。そもそも、明治以来の近代の大学教育は、出自（親の身分や生まれた土地など）からの脱却という社会的機能を内包させて登場した。大学で学ぶことは大卒という教育資格を得ることを指し、どんな職にも就ける

自由と可能性が与えられることでもあった。教育資格で求められたのは、主として知識であり、それこそがこれまでの大学教育の大きな目的と見なされてきた。しかし、知識基盤社会、社会の情報化・グローバル化の到来によって、ただ知識を習得するだけで社会の有為な人材になれる時代は終焉している。今や、知識を活用したり知識をもとに探究したり、その過程で情報を収集したり、まとめた考えや知見を大勢の前で発表し



たりといった活動、ひいてはそれを支える技能・態度（能力）が求められている。もちろんこれらは、これまでの教育でまったく求められてこなかったわけではない。

しかし今日求められているものは、かつての比ではない。情報化が進むなかで、これまでの知識は相対化され、新たな知識は次々と生まれ、それが世界中どこからでも一瞬で情報として発信されるようになっていく。異なる立場、異なる文化の人びとが容易に、頻繁に交流する状況が創出され、お互いの持っている知識や見方、文化を交換する機会が激増している。ときにそれがイノベーションを起し、そのイノベーションがさらに私たちの世界を変えていく。このような社会で、力強く仕事をし社会生活を営むために、大学教育は、上述した「書く・話す・発表する」に代表する活動と、それを支える技能・態度（能力）を育てようとしている。

大学教育は、何を教えるか（teaching）から、学生が何を学習しどのように成長するのか（learning and development）という場へと転換している。これは、教

授学習パラダイムの転換と呼ばれており、ALはこの転換をはかるための有効な方法である。またALは、大学教育の成果を出口の社会と繋げるべく、「学校から仕事・社会へのトランジション（移行）」の課題解決のための方法でもある。

2 初等中等教育にも導入される アクティブラーニング

ALが初等中等教育にも導入されることとなった。次期学習指導要領改訂の目玉ともなっている。下村文部科学大臣の諮問から言葉を拾えば、ALとは「課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習」のことである。別のところで、「何事にも主体的に取り組もうとする意欲や多様性を尊重する態度、他者と協働するためのリーダーシップやチームワーク、コミュニケーションの能力、さらには、豊かな感性や優しさ、思いやりなどの豊かな人間性の育成」に関係づけられるものとも述べられている。大学教育で説明されるALと比較すると、他者や集団を活動として組み込み、学習を個

人的なものから社会的なものへとしていく点、生徒の技能・態度（能力）をはじめとする成長を図っていく点に共通点が見られる。重要なポイントは、ほぼ同じである。

相違点は、初等中等教育のALの説明に、講義一辺倒の授業を脱却することが述べられていないことである。大学教育では、この点こそがまずもつてのALの意義と説明される。しかし初等中等教育では、すでに「言語活動の充実」を通して、特に話す、発表する等の（言語）活動を授業に組み込むことを前学習指導要領の目玉として説いている。講義一辺倒の授業からの脱却はずに謳われている。こうしてALは、言語活動を中核的活動に位置づけて、初等中等教育から大学教育まで一つの用語で、出口の社会に繋げていく学習論となったのである。

3 アクティブラーニングから ディープ・アクティブ ラーニングへ

ALは書く・話す・発表する等の活動に基本がある。しかし、それ

を導入するからといって、これまで目指されてきた物事の深い理解・深い学習が目指されなくなるわけではない。どれか一つということではない。松下佳代・京都大学高等教育研究開発推進センター教授は「ディープ・アクティブラーニング」と呼んで、ALの活動に「深く関与」することはもちろんのこと、これまでの学習でも目指してきた「深い学習」「深い理解」をも目指してこそ、ALはこれまでの学習論を包含した、より高次の学習論となると説く。なお、ここでの深い学習とは、主にフェレンス・マルトンらにしたがって、既有知識や経験を新たな知識と繋いで、知識世界を構造・再構造化することと理解されるものである。



溝上慎一著、東信堂
2014年発行

また、深い理解とは、ジェイ・マクタイラにしたがつて、事実に知識や個別的スキルといった浅いレヴェルから、転移可能な概念としての、あるいは複雑なプロセスとしての知を習得するレヴェル、原理と一般化をはかるレヴェルへと、知の個別的―抽象的―一般的構造の観点から理解を深めることを指す。

活動を入れながらも、しっかりと知識の定着、深い学習をこれまでと同様に目指さなければならぬ。つまり、ALをディープ・アクティブラーニングへと、より高次の学習論へと繋げていかなければならぬ。求められるハードルは上がっているのである。

4

アクティブラーニングを成功させるためのポイント

AL型授業では、生徒の授業への参加のしかたが非常に重要となる。彼らが楽しく参加すれば、ALの技法や指示をいろいろ盛り込んでいくことができるが、そうでなければ、技法や指示が生きてこない。その意味では、私の考えるALを成

功させるための第一のポイントは、ALに楽しく取り組ませるクラスの雰囲気をつくることである。私の大学の授業であれば、授業冒頭にグループでのウォームアップを必ず行う。まず、グループ内で話す順番を決めて、「第一話者の人、手を挙げて」と求める。ここをかなりしっかりと挙げていない者がいれば、そばに行つて「誰？」と尋ねてしっかりと挙げさせる。ここで手を挙げさせられないようでは、その後のALでいくら技法を入れても、いくら指示をしても、その技法や指示は伝わらない。

次に、ウォームアップ課題を与える。「お昼は何食べた?」「お菓子は何が好き?」などできるだけ日常の話題で、一人一分の自己紹介をグループ内でさせる。

この二つがうまくいけば、その時間のALの技法や指示はだいたい通る。これが私の経験則である。ちなみに、私が教育顧問をしている桐蔭学園(中学高校)では、全教科でALを導入しているの、毎時間ALをするのが生徒にとつて当たり前になっており、ウォームアップは次第にやらなくなった。しかし、

まだそういう状況でない学校なら、ウォームアップは入れたほうがいいと思う。

もう一つ。クラスの雰囲気づくり以上に大切なのは、いうまでもなく、ALの良質な課題を与えることである。課題の「良質」さを決めるのは、課題のおもしろさ、課題に対する適度な概念的葛藤である。

例えば、桐蔭学園の地理の教員は、

中国の西高東低という地形を理解させるのに、白地図上で、「中国の地形を大きく二分する境界線を考えて白地図の中に引きなさい」という課題を与え、グループワークをさせた。

地図帳を眺めて、大シンアンリン山脈とユニコイ高原を結ぶ標高五〇〇mの線に気づくこと、河川が東流、南流していることを認識できているかを問う課題であった。「中国の地形は西高東低です」と教えてしまえば簡単であるが、この課題を課すことで、西高東低に関わる山脈や高原との関係、河川の流れる向きなどの知識も関連させて理解させることができる。しかも、それをグループワークとしてさせることで、山脈や高原との関係には気づけても、河川の流れる向きには気づかない者がい

て、それを他の生徒が気づいていることで、自分の至らない理解を知ることができる。互いに教え合うことで、理解を相互補完することができる。一つの知識を他の知識と繋げることで(深い学習)、あるいはさまざまな理解のしかたを採ること(深い理解)で、アクティブラーニングがディープ・アクティブラーニングともなる。

AL技法の一つであるピアインストラクションの提唱者であるハーバード大学の物理学者エリック・マズールは、適度な概念的葛藤を引き起こす問題を、30〜70%の者が正解に導かれるような問題と定義する。つまり、誰もが正解になるような簡単な問題ではなく、逆に誰もが答えられないような難問でもない、その中間程度の問題が生徒の適度な概念的葛藤を引き起こす、という説明である。もともと、これはこれまでの講義を中心とする授業のなかでも求められてきたことであつて、ことさらALで強調することではないかもしれない。

桐蔭学園のAL研修で、ある教員が、「ALを成功させるためのポイント」は、これまでの講義型授業で

求められてきたものと本質的に同じですね。それは、生徒を前にして授業者としての存在感を示すこと。生徒と対面での真剣勝負をすること」と言ったことを、私はよく思い出す。その通りだと私も思う。ALに技法はいろいろあるが、技法を入れれば、AL型授業が成功するわけではない。

ALを導入したときに、問題は次から次へと出てくるだろう。しかし、一つずつ解決して、とにかく前へ進むことが重要である。学校教育の新しい社会への再適応を考えれば、「やはり講義中心の授業がいい」といった選択肢はもはや考えられない。大変だが、問題を解決して、少しでも良いALを作り出していくことを願ってやまない。

参考文献

『ディープ・アクティブラーニング—大学授業を深化させるために—』（松下佳代・京都大学高等教育研究開発推進センター編著、勁草書房、2015年）

『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』（溝上慎一著、東信堂、2014年）

『どんな高校生が大学、社会で成長するのか—「学校と社会をつなぐ調査」からわかった伸びる高校生のタイプ』（溝上慎一責任編集、京都大学・河合塾編、学事出版、2015年）

『理解をもたらすカリキュラム設計—「逆向き設計」の理論と方法—』（ウィギンズ、G・マクタイ、J.著、西岡加名恵訳、日本標準、2012年）

特集

アクティブラーニングで何が変わるのか

Active Learning

生徒が変わった！

川妻篤史（桐蔭学園教諭）

「自分の考え方と周りの考え方の違いがあり、とても参考になった」「クラスみんなの意見を本人の口から聞いたのがおもしろかった」「自分の考えていたのと先生の考えが違った」「毎回思うが、いろいろな考え方や見方がある。自分にはない考え方や意見を取り入れて、日常生活にも生かしたい」「意見が分かれてしまいい大変でした」

これらは生徒たちの振り返りの言葉です。私は、今年度より高一現代文の授業でアクティブラーニングを取り入れ、授業が「教え込み」の場から「学び合い」の場が変わったと実感しています。以前は、授業参加を促すために指名カードを用いてできるだけ多くの生徒を指名しようとしていました。しかし今ではその指名カードも、使う機会がほとんどありません。

何よりも驚いたのは、生徒たちの反応の変化です。昨年度まではただ座って話を聞いているだけでした。

しかし、今は違います。生徒たちが私の解説に「あゝ、なるほど」「えゝ、それは考えつかなかった」と感想を口に出すようになったのです。

なぜアクティブラーニングか？

昨年度、教務主任として学内の授業を見て回りました。そのなかで痛感させられたことがあります。

英語の授業で、関係代名詞butについて教員が丁寧に解説している場面でした。正直、生徒たちは退屈そうでした。授業後、授業担当者に単刀直入に聞いてみました。関係代名詞の一般的な用法を使えるよう指導したほうがいいのではないかと。返ってきたのは、テス



トに備えて丁寧な解説しておかなければという回答でした。

知識を問う問題が多い入試にも対応できるよう、教員は丁寧な解説します。しかし、その丁寧さが生徒たちの自発性を奪います。自発的に学べない生徒たちのために教員はさらに解説を丁寧に加えなければならぬくなります。これはまさに負のスパイラルです。

そんな折、溝上慎一教授の講演を聞き、アクティブラーニングが負のスパイラル脱却の糸口になると私は確信しました。

ペアワーク、グループワーク、そして振り返り

溝上教授のアドバイスは、まず授業にペアワークを取り入れてみるということでした。私は、音読の場面でやってみました。向き合って一文ずつ交代で読み進めます。聞いてもらえる相手がいるのが励みになるよう、読み間違いを指摘し合う場面も見られ、教え合いのいい機会になります。

高一現代文では、要約作成のために段落を三〇字程度の一文にまとめ

る課題を行います。私はこのときグループワークを取り入れています。

グループワークで要約の中心となる一文を段落中から探すのです。まずは個人で考えます。そのとき、グループで話し合えるよう根拠もメモするよう指示します。その後、グループで話し合います。課題の内容によっては答えを絞らせないときもありますが、ここでは一つの答えに絞り込むよう指示します。そのときには、社会に出ればチームで一つの答えを出さなくてはならないこともあるという話をします。グループの答えは「まなボード」で黒板に貼り出し、いくつかのグループにその答えを導いた根拠を発表してもらいます。「まなボード」とは、手軽に持ち運べ、黒板に貼りつけることもできるホワイトボードのことです。発表中は、生徒から質問が飛び出したり、説得力のある発表があれば「お〜」といった歓声が上がったりします。最後に、私の答えを述べ簡単な解説をして終わります。

毎時間、振り返りができるような「ワークシート」を配付し記入させています。これは授業内容をメモするノートも兼ねており、個人やグ

ループの思考が記録できるようになっています。ノートを「思考の戦基地」と位置づけ、考えたことをどんどん書きとめるよう指導しています。振り返りとして、次の二つの質問をします。「『学び』があったか」「時間が短く感じられたか」。生徒たちは◎・○・△・×の四段階で自己評価します。このシートは回収し、私自身の振り返りの材料にしています。

これまでになかった苦勞も

ペアワークやグループワークで一番困るのは、ペアやグループになじめない生徒への対応です。教室にはペアワークを行うときの心構えが書かれた「ペアワークの原則」を掲示しています。活動にうまく参加できない生徒がいるペアやグループには、この掲示を指さして、そつと声をかけるようにしています。

以前に比べ授業の進みが遅くなったことも悩みの種です。ペアワークやグループワークには時間がかかります。これを補うために、毎時間「現国通信」を発行し、授業で扱えなかった詳しい解説を書くようにしまし

た。読んで済ませることができるとのは、それで済ませるようにしています。これにより板書と説明の時間を大幅に短縮できるようになりました。また、授業で紹介できなかった生徒たちの意見も掲載しています。

今後の課題

今後の課題は、アクティブラーニングを通じて自発的な家庭学習につなげていくことです。家庭学習が充実すれば、進度の遅れを補うことも可能です。

さらに、教材と発問の研究がこれまで以上に重要になってくると考えています。ペアワークやグループ



グループワークで「まなボード」に意見を出し合う。

特集
アクティブラーニングで
何が変わるのか

ペアワークの原則

目標:
「社会につなげる深い学びのために、
互いの考えを伝え合おう」

深く学び合うために
1 相手の方を向いて話そう
2 相手の話を誠実な態度で受けとめよう

ルール
関係ない話はしない

教室に掲示している「ペアワークの原則」。

ワークでは、数多く発問することができないので、さまざまな「学び」につながる質の高い発問を研究していくことが不可欠です。教員同士で教材研究のアクティブラーニングを行うことも考えています。

また、生徒をどのように評価するのかという問題もあります。現在、溝上教授のアドバイスを受けながら、ルーブリック評価の導入に向けて研究を進めています。

中学一年のアクティブラーニング導入では、高校生への導入にない難しさがあることもわかってきました。中学生になると、小学校では習

わなかった新たな概念が数多く登場します。中学一、二年は、こうした概念をしっかりと身につけていく基礎養成期であり、こうした概念を自力で活用できる段階にはまだ至っていません。そうしたなかで、ペアワークやグループワークを深い「学び」へつなげるのは非常に困難です。しかも、中学一年生は、対人関係の構

築が高校生に比べて未熟です。ペアワークやグループワークで、対人関係のトラブルが生じないよう配慮しながら授業を進めていかなければなりません。アクティブラーニングが「活動あつて学びなし」にならないよう、発達段階に合わせてどのように導入していけばいいか検討を進めています。

ロジカルに考え、
アクティブに学ぶ

山田英雄（かえつ有明中学高校教諭）

アクティブラーニングの実践という、グループワークやジグソー法、ディベート、プレゼンテーションなどの手法を授業で展開していると予想される方が多いのではないかと。もちろん、本校でもこのような手法を用いることもある。ただ、手法ありきでは何のためのアクティブラーニングなのか不明瞭になる。生徒たちの学びに対する能動性を活かすためにはどうしたらよいかという、よ

り根本的なポイントに焦点を当ててべきだと思う。そこで本校では、アクティブラーニングへ橋渡しをするための基礎トレーニングに力を入れている。好奇心がわき起こり、もつと学びたいと思っても、学ぶためのツールがなければそれ以上アクティブであることは難しくなる。これを回避するために、どの生徒も学びの

ツールを身につけるべきである。ここでは、どのようなステップを踏み、アクティブラーニングへと進める取り組みをしているのかを中心に報告したい。



クリティカルシンキングの トレーニング

本校では、主に総合学習の時間を
使って、図書館の支援を受けながら、
ロジカルに考え、アクティブに学ぶ
姿勢を涵養するために、クリティカ
ルシンキングのスキルをトレーニン
グしている。またベンジャミン・
ブルームのタキソノミーを援用し、
体系的に、かつ継続して実施してい
る。中学一年生では情報収集能力を
鍛え、中学二年生では情報分析のや
り方、そして中学三年生では情報を
発信することに重きを置きながら、
三年間かけてトレーニングする。

クティブラーニングの基礎をなす。
また、正しく情報を受け取るため
に、事実と意見を区別するトレーニ
ングを行う。例えば、「あるテーマ
パークは大人気だ。いつ行っても混
んでいて、どのアトラクションも長
蛇の列だ」はどこまでが事実で、ど
こからが意見なのかを考えさせる。
本当に「大人気」なのか。空いてい
る日はないのか。「どのアトラクショ
ンも長蛇の列」は事実なのか。どう
したら証明できるのか。このような
クリティカルな視点をもつことで、
気づきが多くなる。

中学二年生では、集めた情報の分
析方法をトレーニングする。基本は
グルーピングである。分類基準を決
め、同類項をまとめたり、階層構造
を構築したりする。例えば、文房具
のもつ意味合いについて分析する
ために、「シール」を取り上げる場
合、四く五人の班をつくり、「シー
ル」とはどのようなものを各自で
付箋に書き留める。一枚の付箋に一
項目を書き、できるだけ多く書き出
す。各自が書いた付箋を班ごとに大
きな模造紙に貼り出す。ここからグ
ルーピングしていく。共通項を全員
で見つけながら、似ているものをグ
ループごとにまとめるのである。生
徒たちは「シール」のもつ役割や意
味などを再認識したり、思いもよら
なかつた点に気づいたりする。

このように、誰でもできる「型」
を提示して、その通りに生徒がタス
クに取り組み、ある一定の成果が得
られれば、生徒は自発的に取り組む
ようになる。これを通して、新しい
視点からものを見たり、結果的には
能動的に意見を言うようになる。こ
れこそ、アクティブに向かうための
基盤となるのではないか、と考えて
いる。

こうしたスキルがあれば、グルー
プワークをしなくてもアクティブな
学びは起こりうる。例えば講義を聞
いていて、もっと知りたくなり、自
分から図書館に行き、情報収集し分
析するという行動に結びつくのであ
れば、これも十分アクティブラーニ
ングと呼べる。

教師はファシリテーター

アクティブラーニングの手法に習
熟していなくとも、教師が生徒のガ
イド役になる時間を確保するだけ
で、十分アクティブな学びを創出で

きると考えている。極論すれば、「生
徒に下駄を預ける」ような心持にな
ることだ。しかし、教師は何もしな
いのではない。例えば、高校一年生
へのタスクで、ある英文を読み、書
かれていない次の段落の内容を推測
させる。まずは個人で、そしてペア
で。続いて三人以上で、各々の推測
した内容についてコンセンサスを
得られるかどうか議論させる。時間



この絵からどんなス
トーリーが創造でき
るか、フレスト中。



校訓「怒るな動け」とは現代社会では何を意味するのか、について議論。

見計らい、複数の生徒に発表させる。出てきた推測を比較検討し、どれが無理なく論理的かを確認する。いわゆる「当てずっぽう」ではなく、書かれている部分に論拠を求めて推測することがポイントとなる。教師は彼らの論理性を判定し、議論が進むようにファシリテーターの役割を担うのである。

また教師は、答えが一意に定まらず、予定調和に終わらないためのトリガーアクションを与えて、生徒の能動性を刺激する。例えば、高校

一年生に、「あなたが文部科学大臣だったら、どんな教育を実施し、どのような社会にしたいか考えてみよう」「そのためには、どのような子どもたちを学校で育てればよいのだろうか」などと問いかける。これらは、生徒が問題を自分のこととして捉え、答えは自分しか知りえないような問いかけである。また、「自分の住んでいる町の問題点を挙げ、解決策を模索してみよう」といった、より身近な問題を考えさせるのも中学生くらいには適切だと思う。

更に事前に知識が必要となるようなトリガーアクションもある。例えば、地学や歴史の時間に、原始時代の知識を得た後に次のように問いかけてみる。「あの映画で、原始人がマンモスと戦うシーンがあった。どこか不自然な箇所はないだろうか。またそれはなぜだろうか」。ある程度オープンエンドではあるが、知

識がないと取り組むのが困難な発問である。ただ、グループなどで実施すれば、多くの気づきが期待できる。また、政治経済などの時間に「TPPが発効したら、日本はどうなるだろうか。米農家、製薬会社経営者、自動車製造会社経営者の立場に立って論じてみよう」のような発問は、知識・データの読み解きスキル・類推力など、より高度なレベルが要求される。

いずれにしても、「自分だったらどうするか」と考えた時点ですでに能動的である。ここで大切なポイントは、「なんとなく思う」だけでは不十分である、という点だ。もちろん、「勘」や「ひらめき」はとても大切だが、なぜそのように考えたのかを、証拠や根拠をもって説明できることにより重きをおく。そのため、必要な知識が欠落していたら、情報収集すればよいし、またその情報が自分の主張の根拠となるかどうかを比較・対照させたり、原因・結果の観点から考察したりする。この行為こそがアクティブであり、基本は中学時代のトレーニングで培ったスキルである。

ブラーニングにできる部分を設けることは、さほど困難なことではないと思う。大切なことは、生徒の能動性を引き出すための継続したスキルトレーニングと、解答に至るプロセスの論理性をチェックすること。そして、トリガーアクションを工夫し、教師はファシリテーターとして機能することが、アクティブラーニングのカギとなるのである。

特集
アクティブラーニングで
何が変わるのか



りんご記念日応援団 (11人)



TJF

『りんご=隣語』。となりの人とつながるためのことばです。りんご記念日応援団の皆さん、大切な「りんご」の思い出を綴って、未来を担う人たちのことばとの出会いを応援してください！

Jan 1

1月1日



1982年頃、スーダンで

世界 130カ国も回っていると、その国のことばが全部わかるなんてありえません。でも誠心誠意伝えようとする、聞こうとする。これが人とのコミュニケーションの基本ですね。人と人との絆にはことばが大事なんです。ことばが通じるようになって初めて、相手のことが理解できるようになるわけですから。



田沼武能さん
(写真家)

Jan 9

1月9日



祈りのピラミッド

国や文化を超えて、美しきものの、聖なるものへの想いで人の心がつながっていく。若き日、人生に迷い続けた私でしたが、偶然に偶然が重なって導かれるように始めたアラビア書道を続けてきたことで、今そんな輪のなかに生かされていることは望外の喜びです。



本田孝一さん
(アラビア書道家)



りんご記念日応援団 (11人)

Jan
11

1月11日



2000年、フランス料理学校にて

まずは語学を習得した結果、どのようになりたいかをイメージすることが大切だと思います。私の場合、少し無口な15歳でいて、話の内容は成熟した女性。と勝手にイメージして難しいフランス語の文法を一応クリア出来たのでした。今ではパリの古書店で、昔のフランス料理のメニューを収集する趣味も誕生しています。



山本容子さん
(銅版画家)

Dec
19

12月19日



日本情報誌『知日』の日本語ダイジェスト版

「知日」の2文字を縦に並べてみてください。「智」となります。知ることが智慧につながっていくのです。特に若い人たちには、外国語を勉強することで知識を増やし、それを智慧にしていってほしいと願っています。



毛丹青さん
(『知日』主筆)



たくさんの応援メッセージ
ありがとうございます!



TJF

りんご記念日応援団のメッセージはこちら↓



tjf.or.jp/ringokinenbi/



2015年度の取り組み

新しい取り組み

「外国語学習のめやす」 ロシア語版作成プロジェクト、始動！

Russia

「外国語学習のめやす」ロシア語版の作成、日露教師、生徒の交流を行うプロジェクトを始めました。今年8月にロシアの高校日本語教師6名を日本に招聘し、日本のロシア語教師と合同ワークショップを実施したのを皮切りに、このワークショップで作成した授業案を日露それぞれの先生が秋に実践します。そして、つながりの実現をめざすプロジェクトの集大成として、日本の高校生が授業で完成させた作品を携え2016年にモスクワ、ノボシビルスクを訪れて、ロシアの高校生と交流する予定です。



モスクワ大学近くの看板。
上から3番目は丸亀製麺。

新浪微博 (Sina Weibo) に 「点击日本」(くりっくにっぽん) 開設



中国で最大のSNSサービスのひとつ「新浪微博」の登録者は4億人といわれています。そこで、日本・日本語ファンに日本の情報を届けるために、8月にTJFのページを開設しました。「くりっくにっぽん」の更新情報や、『好朋友』に掲載されているマンガの擬態語・擬声語、日本の中国語学習者がつくった漢俳などの情報を発信しています。

高校生の漢俳。「夏天过去了
又到秋天看红叶 一年真快啊」

China



その他の事業

✓ 海外の小中高校における日本語教育と日本の文化についての理解を促進する事業

1. 中国における日本語教育の促進
 - ・「好朋友」プロジェクト10周年事業の実施（遼寧省大連）
 - ・中国中高校日本語教師研修（湖南省長沙）
2. 日本の文化と人びと紹介ウェブサイト「くりっくにっぼん」
 - ・中高校日本語教師向け「くりっくにっぼん」ワークショップ（オーストラリア、フィリピン）

✓ 日本の小中高校における外国語教育と多様な文化についての理解を促進する事業

1. 「外国語学習のめやす」の活用の促進
 - ・「外国語学習のめやす」マスター研修
2. 21世紀型の外国語教育推進のための教師研修
 - ・當作靖彦カリフォルニア大学サンディエゴ校教授による「学習を促進する評価のデザイン」などのワークショップ
3. 隣語講座の開催
 - ・中高校生のための韓国語講座
 - ・高校生のための中国語講座
 - ・隣語教育への理解を深めるための保護者向け講演

✓ 国内外の小中高校生間と教育関係者間の交流を促進する事業

1. 互いの言語を学ぶ中高校生の交流
 - ・日韓の中高校生交流プログラム「Seoulでダンス・ダンス・ダンス2015」（韓国ソウル）
 - ・日中の高校生交流プログラム（神奈川、東京）
 - ・韓国の中高校生日本招聘（東京、宮城）
2. 隣語教育に取り組む高等学校校長交流
 - ・日韓の校長交流プログラム（韓国ソウル・大田）
 - ・日中の校長交流プログラム（神奈川、東京）

✓ 広報事業

1. T.JF 事業報告『CoReCa』の発行
2. メールマガジン「わやわや」の配信
3. ことばと文化の体験プログラム「りんごをかじろう」

TJFは皆さまからのご協力、ご支援をいただいで事業を行っています。
 二〇一四、二〇一五年度も右記の皆さまに支えていただきながら事業を進めています。
 ここに改めまして、お礼を申し上げます。

賛助会員

〔法人〕

■ 2014 年度

伊藤忠紙パルプ(株) 王子製紙(株) 鹿島建設(株) 春日製紙工業(株) キングレコード(株) 共同印刷(株)
 (株)廣済堂 (株)講談社ビジネスパートナーズ (株)光文社 (株)国宝社 (株)資生堂 (株)世界思想社教学社
 第一紙業(株) (株)第一通信社 大ニ製紙(株) 大日本印刷(株) (株)大洋社 (株)電通 (株)トーハン
 図書印刷(株) 凸版印刷(株) 豊国印刷(株) 日興紙業(株) 日本出版販売(株) 日本製紙(株)
 日本図書普及(株) (株)フォーネット社 富士ゼロックス東京(株) 二葉製本(株) 北越紀州製紙(株)
 丸王製紙(株) 丸住製紙(株) 丸紅紙パルプ販売(株) (株)三井住友銀行 三井住友信託銀行(株)
 三菱製紙販売(株) 三菱東京UFJ銀行(株) (株)ムサシ (株)本貴 (株)彌生洋紙店

■ 2015 年度

伊藤忠紙パルプ(株) 王子製紙(株) 鹿島建設(株) 春日製紙工業(株) キングレコード(株) 共同印刷(株)
 (株)廣済堂 (株)講談社ビジネスパートナーズ (株)光文社 (株)国宝社 (株)資生堂
 (株)世界思想社教学社 第一紙業(株) (株)第一通信社 大ニ製紙(株) 大日本印刷(株) (株)電通
 (株)トーハン 図書印刷(株) 凸版印刷(株) 豊国印刷(株) 日興紙業(株) 日本出版販売(株)
 日本製紙(株) 日商岩井紙パルプ(株) 日本図書普及(株) (株)フォーネット社 富士ゼロックス東京(株)
 北越紀州製紙(株) 丸王製紙(株) 丸住製紙(株) 丸紅紙パルプ販売(株) (株)三井住友銀行
 三井住友信託銀行(株) 三菱製紙販売(株) 三菱東京UFJ銀行(株) (株)本貴 (株)彌生洋紙店

〔個人〕

■ 2014 年度

石井誠 市原徳郎 岩野忠昭 小貫邦夫 カイト由利子 鈴木茂次 高崎孝 高嶋伸和 中野佳代子
 浜田博信 細谷美代子 松井外恵 柳川敦重 匿名希望 2名

■ 2015 年度

石井誠 市原徳郎 カイト由利子 鈴木茂次 高崎孝 高嶋伸和 浜田博信 細谷美代子 松井外恵
 柳川敦重 匿名希望 1名

助成団体

■ 2014 年度

漢語橋基金 (一社) 尚友倶楽部 (公財) 双日国際交流財団 (公財) 東華教育文化交流財団
 (公財) 日韓文化交流基金 (公財) 三菱UFJ国際財団

■ 2015 年度

漢語橋基金 (一社) 尚友倶楽部 (公財) 双日国際交流財団 (公財) 東華教育文化交流財団
 東京韓国教育院 (公財) 東芝国際交流財団 (公財) 日韓文化交流基金 (公財) 三菱UFJ国際財団

寄付者

■ 2014 年度

(株)講談社 豊国印刷(株) 安藤まどか 伊佐恭子 石井恵理子 石岡広海 石山雄太 いっこく堂
 池北昌子 池谷尚美 大島弥生 大砂嵐 大村和枝 柿原武史 桂竹丸 金子史朗 門脇薫 上村圭介
 河合薫 川津英一郎 神原ひかり 古石篤子 榮谷温子 佐藤篤 シム・ヒョンミン 杉谷眞佐子
 千場由美子 網島延明 にしゃんた 長谷川由起子 ひとみみのる 廣田浩二 藤掛未来 本田孝一
 ポンダレンコ・オクサーナ 眞鍋禮孝 チャド・マレーン 水本敬子 三田崇文 森住衛 六本木雅一

■ 2015 年度

(株)講談社 小川竹虎 田沼武能 丸山悠輝 三田崇文 毛丹青 山本容子

コラボレーター

■ 2014 年度

KERN MIKA 施恩 荒木さくら 井上まゆ子 江上天夢 大川瑛里 金乗民 小島綾夏 坂本空海
 島田りみ 園田彩英 高橋未夢 竹下真由 長塚愛実 夏見映里奈 新倉ゆま 北條久美 堀川智聡
 馬麗娜 松尾絵菜 三浦映那 山川友梨子 山下美誓

■ 2015 年度

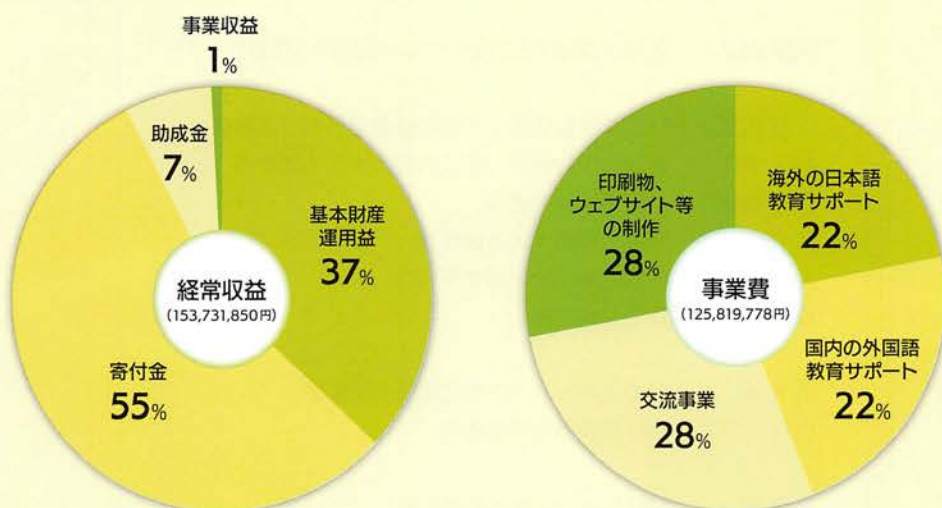
大森美和 和田利一

(敬称略 五十音順 2015年7月31日現在)



財団の概要

- 設立** 1987年6月22日
2011年4月1日、公益財団法人に移行
- 出捐企業** 王子製紙株式会社、株式会社講談社
大日本印刷株式会社、凸版印刷株式会社
日本製紙株式会社、株式会社三菱東京UFJ銀行
- 基本財産** 20億円
- 財政規模** 2014年度の経常収益は約1億5,400万円、事業費は約1億2,600万円でした。
内訳は以下の通りです。



サポートのお願い

さまざまなことばや文化の学び、交流を通じて、子どもたちが21世紀を生きぬく力をはぐくむことがTJFのミッションです。このミッションを達成するために、共感していただける方々に次のようなご支援をお願いしております。

■ コラボレーター

皆さまの時間、得意なこと、ネットワークを使って、私たちの活動をサポートしていただける方々にコラボレーターとしてご登録いただいています。

外国からのお客様のアテンドや交流活動のコーディネート、TJFの出版物やウェブサイトの翻訳、TJFが開催するイベントの準備などがあります。

■ 寄付

TJFの活動全体に対する寄付、特定の事業を指定した寄付、りんご記念日寄付などがあります。

■ 賛助会員

継続的な支援をしていただける方に賛助会員になっていただいています。

年会費：法人会員一口 50,000円
個人会員一口 10,000円

寄付金につきましては、税制上の優遇措置が適用され、所得税や法人税の控除を受けることができます。さらに、個人寄付者の皆さまには確定申告の際、減税効果の高い「税額控除方式」を選択していただけます。

ご支援くださる方々には、TJFが発行する印刷物を送付するほか、TJFが催すイベントのご案内を差し上げています。



財団の組織

評議員会長 評議員

野間 省伸	(株) 講談社代表取締役社長
饗庭 孝典	東アジア近代史学会副会長
青山 秀彦	王子製紙(株)代表取締役社長
足立 直樹	凸版印刷(株)代表取締役会長
北島 義齊	大日本印刷(株)代表取締役副社長
長瀬 眞	(株) ANA 総合研究所代表取締役社長
奈良 久彌	(株) 三菱総合研究所特別顧問
芳賀 義雄	日本製紙(株)代表取締役会長
山根 隆	(株) 講談社専務取締役

理事長

渡邊 幸治 *	公益財団法人日本国際交流センターシニア・フェロー、元駐ロシア特命全権大使
---------	--------------------------------------

常務理事

内藤 裕之 *	(公財) 国際文化フォーラム常務理事(常勤)	* は代表理事
---------	------------------------	---------

理事

上野 田鶴子	特定非営利活動法人日本語教育研究所理事長
梅田 博之	麗澤大学前学長、東京外国語大学名誉教授
金丸 徳雄	(株) 講談社取締役
興水 優	東京外国語大学名誉教授
境 一三	慶應義塾大学経済学部教授
佐藤 郡衛	目白大学学長

監事

清水 至	公認会計士、(独) 理化学研究所監事
白石 光行	(株) 講談社常任監査役

顧問

小田 厚	(株) トーハン海外事業部長
北島 義俊	大日本印刷(株)代表取締役社長
佐藤 信一	日本製紙(株)専務執行役員印刷用紙営業本部長
鈴木 孝夫	慶應義塾大学名誉教授
藤田 弘道	凸版印刷(株)相談役
鮑 啓東	人材派遣健康保険組合前理事長
三木 繁光	(株) 三菱東京 UFJ 銀行特別顧問
宮路 敬久	日本出版販売(株)取締役
吉田 研作	上智大学教授

任期：評議員一期4年、理事、監事、顧問一期2年
(敬称略 五十音順 2015年6月末現在)

事務局

事務局長	水口 景子
事務局次長	藤掛 敏也
主任	室中 直美
副主任	千葉 美由紀 長江 春子
職員	柴田 幹子 沈 炫旻(シム ヒョンミン) 中野 敦 宮川 咲 森 亮介

CoReCa 2014-2015

国際文化フォーラム事業報告

2015年8月発行

公益財団法人国際文化フォーラム

112-0013

東京都文京区音羽 1-17-14 音羽 YK ビル 3F

Tel 03-5981-5226

Fax 03-5981-5227

Email forum@tjf.or.jp

URL www.tjf.or.jp

Facebook [facebook.com/TheJapanForum](https://www.facebook.com/TheJapanForum)

デザイン 山本義明 (goldfish design)

校閲・校正 飯田陽子

印刷・製本 凸版印刷株式会社



CoReCa?

Co = Collaboration **Re** = Relation **Ca** = Catalyst

協働

関係

触媒

人と Collaborationしながら、Relation を築いていく。
TJF は人びとをつなぐ Catalyst でありたいと思います。



公益財団法人
国際文化フォーラム
THE JAPAN FORUM
日本国際文化交流財団
일본국제문화교류재단